



第 13 号
平成 18 年 7 月 17 日
発行
筑波山がまの油売り口上研究会

大声とは

橋 本 登

自衛隊に入隊した頃、先輩達から自衛隊は一点、二表、三敬礼、何もできなくても馬鹿の大声」だとしてよく言い聞かされた。もう三十年も前の事である。少々記憶曖昧ではあるが、一は仕事(業務)に優れよ、二は計画(企画)作成に優れていること、三は礼節を重んじ、上司に対し欠礼などしてはならぬ、これらの三項目の出来ない者は声でも大きく発声せよとの事であったのである。当時の自衛隊で、先輩達が経験から得た処世術だったのである。

私は、まさしく「馬鹿の大声」である。自衛隊生活では力不足を大声でカバーしてきたような気がする。ある日、トイレの中で部下が「課長は声が大きく、部屋が狭いのにかまわずで、もう少し低い声で話して頂きたいなあ」と、話しているのを耳にした。大きいというより甲高い声のようだ。以来、心がけていたが、興奮するについつい高くなるように、妻にも時々嗜められた。だが、今まで一度も会議の席などで「声が小さくて聞き取れません」などと言われた事は無く、部下からの評判は良かったのだが、上司からは「もう少し小さい声で」と、

戒められたこともあった。

今でも声だけは大きくて電話などの応対で「声がお若いですね」と、歯の浮くようなお世辞を頂戴しつつも、友人からは「周囲に聞こえるよ、もう少し小さな声で」と、時々注意されるのだが、段々と大きくなってしまい、話の途中で気がついてボリュームを下げるということの繰り返しである。生涯この大声は治らないと思っている。

大勢の人の前でこそこそと小声で話すよりはるかに「馬鹿の大声」の方が、自分では良いことだと密かに思っていた矢先に、筑波山がまの油売り口上の講座を知り、早速飛びついた次第である。脈々と受け継がれている伝統と歴史には、例え趣味といえども決め事には従わなければならず、気軽に趣味として習うには容易に飛び込めそうにない環境・・・と、考えていたが「ガマの油売り口上講座」に出席して気楽に教えていただく雰囲気につきり魅了されたのである。

講座から、早くも一年が経ち、月一回の練習の日の約二時間の間に思いっきり声を張り上げて講じるのだが、自分の音域を掴むのは難しく、今でも自分のイメージする声が出ず途中で息切れをしたり(多分に年のせいもあると思うが)、低すぎたり詰まってしまうたりで、その時その時の調子が掴めず真に歯痒いものだ。習い事は何でも、想像していた以上に奥深いものであり、生半可な気持ちでは出来ないものだ。と最近ひしひしと感じている。正直なところ練習している間は、苦痛に思う時もあるが、大声を出す気持ち良さはなんとも言えず爽快である。メンバーも先生を始め全員気心が知れた仲で、和気藹々と稽古に励み、終わった後の

雑談もまた大いに盛り上がっている。こんな楽しい仲間が出来るのならばもっと前から始めていれば良かったと思う今日この頃である。

若い頃はどちらかと言えば資格を取ったり仕事や遊びの趣味の仲間であり、又、五十歳で僧侶の資格を取る時も、その技量向上を目指しての仲間であった。それはそれで青春を楽しんだよき思い出として残っている。「五十歳までは足し算の人生、それを過ぎれば引き算の人生」という昔の名言があるが、私自身も引き算の年齢に達した頃より、趣味は趣味として楽しむ程度として、そこから仲間作りが出来ればと思っていた。

自分に合った趣味を素早く発見し、楽しむとともによき人間関係が形成できて生活や仕事に張り合いや潤いを持つことが出来れば、結果そのものが実益になり精神的財産にもなる。「筑波山、ガマの油売り口上」は、今の私にとって気楽に出来、大声を出し、友と語らう心身ともに最高の趣味と実感している。いつかは、先輩達のように鮮やかな技を身につけ、私も人前で「ガマの油売り口上」で、多くのお客様を感動させる事を夢見て、自分らしく生きるため自己に対して、周囲に対して微笑む心を失わないように、この雄大な筑波山のふもとの勤務地で頑張っていきたいとおもっている。「さあさあ、お立会い。御用とお急ぎでなかつたら、ゆつくりと、私の大声を聞いてください・・・」

橋本様には十七代名人の口上CD 起こしにご苦勞をいただきました。紙面をお借りしてお礼申し上げます。

なお、ご希望の方は会にお申し出ください。

最近つくづく思うに

「あー、もう十年たったのか」と。

現在の住まいは八郷地区の小屋という集落の一角を終の棲家として、日々を過ごしております。西側には関東の清水寺と謳われる西光院の峰寺山と、常陸国の時代より足の神様として信仰の深かった「日本最初足尾神社」の足尾山が間近に眺められ、小さな我が家で唯一の自慢である一坪の「檜風呂」の浴槽からは、丁度五月に植えられた田圃の苗が、昼は緑色の絨毯の毛並みの上を、風に靡かせながら周囲の景観に色を添えています。

また、夜になれば「筑波山麓蛙の楽唱団」が一斉に、軽やかな声で歌いだし、時たま小さな庭に迷い込んだ「蛭」が、浴槽の窓辺近くまで飛んできて、浴槽の縁に垂れながら眺めていると、浮世離れのした別天地で過している様な錯覚にさえ捕らわれ、八郷に移り住んだ幸せを感じております。

申し遅れましたが、私の生まれは今話題になっています「IXつくばエクスプレス」の始発である東京秋葉原駅の真ん前に当たる旧・松富町と言われる場所です。昭和十五年に生まれ、戦時中の疎開で千葉県松戸市に移り住み、そのまま数十年を過ごした後、平成八年に現在の八郷地区に移り住みました。

旅が好きな私にとって、八郷は魅力一杯の土地で、その年の秋には「茅葺き民家のぶどう園」があると聞いて、買い物ごと訪れました。園主の大場克巳さんと知り合いになったのがきっかけとなり、

観光関連の地域活動のお手伝いをする様になりました。

八郷暮らしの十年間

鈴木 俊勝

我等ががまの油売り口上研究会のために、歴史探訪の案内や総会時の講演を快くお引き受けくださった鈴木様に、終の棲家と思い定めて、移り住まれた八郷への思いをお寄せいただきました。

それ以後、次々と地元の方達をご紹介して頂き、二十人ほどで観光の勉強会を開くまでになりました。

その頃より、新治の伊藤三雄先生、並びに、千代田の仲田安夫先生のお書きになられた、「八郷の昔話」に

興味を持ち、特に八郷の小野越地区には新治村と同様に、「小野小町手伝説」がある事を知り、地元の方の承諾を得て、十人ほどのボランティア仲間と共に景観整備活動に汗を流しました。

この事が契機となり、当時の新治村「小町の館」の館長さんでおられた、林正一氏、そして「がま口上の名人」の宇野昭氏ともお

知り合いになる機会を得、小野越地区の「小町万灯会」の際には、和紙に描かれた素晴らしい「絵」をご提供頂きました。茨城県「全国グリーン・ツーリズム大会」の時には、宇野様の「がま口上由来の紙芝居」、並びに、田神様の女性ががま口上人芸をご披露して頂き、参加したお客様方に大好評を博しました。

この様に筑波山麓周辺の皆様の暖かいご支援のもと、何とか八郷に根付く事が出来た事に、心より感謝の気持ちで一杯です。

只今は、合併して石岡市になりましたが、引き続き、「茅葺き民家」の保存活動や、地域の自然景観の保全と整備を、ボランティア仲間と共に、少しずつではありますが、続けて行きたいと考えております。

今、「茨城の自然と歴史」が首都圏の方達に注目され始めておりますので、これからも頑張りたいと思っております。



父母への哀愁

小宮山 明美

父母は、掛け替えなき私の財産であると私は思い、『振り返るは黄泉へ旅立ちた父と母を悲しみに戻すこと』と言うが、考えぬ事としております。一昨年より悲しみは次から次へと私を襲い、打ち拉がれし日々を過ぎ、自らの心がすべて悲しみに変わり入る事になりました。一六年十月二十一日、母は黄泉へと、後を追うように実兄もいき十七年には兄を追うように義姉は夫のもとへと七夕の日に旅立ち逝き、十一月十九日、父も母の許へと逝きました。

こんな悲しみの中に父から私へのプレゼントであったのか、小野小町文芸賞を受賞する榮譽に与ることとなり大変うれしく存じました。秀逸作品として選ばれたのは

『意識なき母の目尻にひかるもの
指でぬぐいてそっと抱きしむ』

母への愛しき吾の心を詠んでみたものでした。その受賞の日を父は待ち、いただいた盾と賞状を父の手に与え「この日まででは、どんなことがあっても逝かないで」と、母へ伝えてもらうことを父に約束しておりました。受賞決定から一ヶ月間、父は頑張つて生を保ってくれたのです。平成十七年十一月十九日、愛しき父は私一人に見守られ黄泉へと逝き、きつと母に私の受賞を知らせてくれたと思います。

悲しみに何も手つかずの二年間、ようやく平静を取り戻したかのような吾に気付くように

なりました。悲しいときに電話でよくハマ江ちゃんには慰めていただき、あのときの私は彼女の本当のやさしさを知りました。これもひとえに林先生率いる「ガマ研」のおかげと感謝致しております。
最後に父母を詠みました短歌を記させていただきます。

白蓮の花を好みし母なりき

風に揺らぎてはやも散り初む

御仏にみちびかれしつ黄泉の世に

兄も逝きましぬ母につづいて

父の手は働き続けた明治の手

握られし吾の手恋となるまで



両親様はともに九十七歳でのお別れと伺いました。小宮山様のお二人への思いの深さを刻みつつ、合掌。

口上は生きる糧②

田神 まさこ

前号の続編ということで、トルコの絨毯売り口上の分析を試みしてみる。

- その1 精悍な好男子いわゆるイケメンである
- その2 日本語が堪能で各国、特に日本の時事に通じている
政治経済だけでなく、バラエティーにもすぐ反応できる
- その3 接尾語的に「お客様」をつけ、客をよいしょすることを忘れない
- その4 ここでなければ、この品質の品をこの価格で手に入れるのは困難と訴える

その1、外見は客の目を最初に惹きつける重要なポイントである。(この点、がま口上の衣装は十分に異色を放っている) **その2**、時事やバラエティに通じていることが人の知性や厚みを感じさせ、身近な印象を与える。 **その3**、見下されるより、持ち上げられるほうが財布の紐は緩みやすい。

その4、この機を逃すと、大きな損出になると思われ、周りの反応につられ易くなる。

物売り口上の基本はすべて同じということか？空飛ぶ絨毯ショーについては次の機会に・・・。

あるリゾート地のホテルでの話。

私の部屋で仲間を接待しようとして、フロントに「シンコ・ベツ……」と電話したら、フロントの淑女達のケラケラ笑う声がしばし聞こえた。何で笑っているのかな？と不思議に思い、後で辞書を引いたら、何と「コツプ」五個持つて来て下さい（シンコ・ベツ……）と言ったつもりが「シンコ・ベツ……（ギツス五個持つて来て下さい）」と言ってしまいました。これでは淑女達が笑うのも当然。これも外国ならではの失態でした。しかし、この程度で驚いていては語学は上達できません。『がま口上』も同じかと思いません。習得する過程においては多に恥じをかくことも必要かと思えます。

海外ごぼれ話

成田 敏夫

私の滞在期間が一年を過ぎ、国際免許が失効したため、現地事務所の現地人運転手に乗せてもらい某所に出かけた時のことです。

運転中に突然、妹の写真を見せてくれた。まあ、まああんな妹だったので、私も躊躇せず「トレ・ジョリ（大変・美しい）」とほめてやった。その時は、運転手も満更でもなさそうな表情だった。ところが、この「ほめ言葉（トレ・ジョリ）」が事の発端。運転手はこの事を、私に分からない所で妹の主人に連絡。翌日に知った事ですが、この主人は、この話を聞いて相当に興奮し、私を殺してやるとの勢いで、その晩は、私が行きそうな場所（レストランなど）をシラミ潰しに探し回ったそうです。

何故？ 後で分かったことですが、“ほめた”つもりが、“ください”と受け取られてしまった。つまり、仏語の「トレ・ジョリ」は、今回のように「妹をください」と解釈されてしまい、使い方によっては、非常に危険な言葉、なあと痛感させられました。幸運にも、主人の興奮が絶頂時に会わなかったため、事無きを得た一騒動でした。

がま口上講座について

- ① 九月二十三日（土）
- ② 十月七日（土）
- ③ 十月二十一日（土）
- ④ 十一月五日（日）

会員の練習会3〜6回を兼ねます。

午前十時〜

正午まで

(注) 今回から会場が小町の館から土浦市新治地区公民館へ変更になります。お誘いあわせの上ご参加下さい。

第58回筑波山ガマ祭り 研究会の口上出演のご案内

恒例のガマまつり、当研究会からもたくさんの会員が出演しますので、応援等よろしくご協力ください。

期日：8月6日（日）

時間：11時、12時、13時、14時（開始予定時間）

場所：御幸ヶ原周辺、つつじヶ丘周辺

研究会会員による口上披露は2箇所各4回の予定

☆ガマ石にて渡辺由正氏による口上奉納があります。

編集後記

湿度たっぷりの梅雨らしい昨今。締め切りに追われて、さらに暑苦しい数日を過ごしました。お陰さまで無事発行の運びとなりました。次号にむけ原稿のご準備をお願いします。写真や小話も楽しいかと思えます。メールでお寄せのときは

tgod6474@ybb.ne.jp まで

編集子